

「きもの」文化の伝承と発信のための教育プログラムの開発

－「きもの」の着装を含む体験学習と海外への発信－

The development of education program

for the cultural folklore and for the transmission of “Kimono” culture

- Learning experience of how to wear a “Kimono” and transmission to foreign countries-

薩本 弥生^{*1+}, 川端 博子^{*2+}, 堀内 かおる^{*1+}, 扇澤 美千子^{*3+}, 斉藤 秀子^{*4+}, 呑山 委佐子^{*6+}
Yayoi Satsumoto^{*1+}, Hiroko Kawabata^{*2+}, Kaoru Horiuchi^{*1+}, Michiko Ougizawa^{*3+}, Hideko Saito^{*4+}
and Isako Nomiyama^{*5+}

*1 横浜国立大学教育人間科学部 神奈川県横浜市保土ヶ谷区常盤台79-2

Faculty of Education and Human Sciences, Yokohama National University,

79-2 Tokiwadai, Hodogaya, Yokohama 240-8501, Japan

*2 埼玉大学教育学部

Faculty of Education, Saitama University

*3 茨城キリスト教大学生生活科学部

College of Life Sciences, Ibaraki Christian University

*4 山梨県立大学人間福祉学部

Faculty of Human and Social Services, Yamanashi Prefectural University

*5 大妻女子大学短期大学部

Junior College Division, Otsuma Women's University

⁺ 服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化学園大学

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture,

Bunka Fashion Research Institute, Bunka Gakuen University

Abstract : Because people in Japan put on a western style dress in daily life, “Kimono” culture is not enough understood among the young Japanese. Many foreigners are highly interested in Japanese culture. With a diverse background concerning “Kimono” culture, the purpose of this research was to develop an educational program to teach a “Kimono” culture as a folklore and then to transmit the information to the world. We focused especially on “Yukata” and have developed an experiential type of education program including how to wear a “Yukata”. We have developed text and e-learning digital teaching materials of “Introduction to the Yukata” both in Japanese and English version. For e-learning site of “How to wear and how to fold the Yukata”, we also made a Chinese version. We have done the class practice at about 10 junior high- and high schools in Japan. We carried out a survey about (1) interest and experience about “kimono” and “Yukata” before the class and (2) the skill, the understanding, the interests, and the feeling of wearing Yukata after the class. Try-on-Yukata workshop was held as a pilot educational program to

*1) satumoto@ynu.ac.jp

transmit Kimono culture, one part of the traditional cultures of Japan, to China (Shanghai) with 40 young Chinese people in September, 2010 in cooperation with the Japanese consulate. We also conducted Try-on-Yukata workshop in UK with about 55 junior school students (in 2010) and 40 junior high school students (in 2011) at Blessed Robert Sutton School (Burton on Trent) with about 26 adults and University students in Loughborough (in 2009) and with 18 University students (in 2011). For all workshops, the participants tried, with our help, to put on Yukata after demonstration of an instructor showing how to put them on. We carried out a survey about (1) interest in modern and traditional Japanese culture before the workshop and (2) the skill, the understanding, the interests, and the feeling of wearing Yukata after the workshop. Through an analysis of the survey in Japan, UK and China, they felt that they did not have enough skill but they felt a good understanding and interest about it. About the feeling of wearing, they felt happy and formal even though they also felt too tight. It was verified that the class practice including try-on-Yukata workshop could raise the interests in kimono culture for Japanese and foreign young people. The interest in “Kimono” culture can create more understanding towards Japanese other culture and it can contribute to the international exchange and to transmit traditional culture to the world.

要旨:日本の「きもの」文化は、日常着が洋装化し既製服が普及した今日、若者に理解されにくくなりつつある。一方、全国規模で外国人観光客が増加傾向にあり、情報のみならず、人やモノの移動を含むグローバル化が進んでいるが、日本の伝統文化をどのように発信するかについての検討は十分でない。このような「きもの」文化をめぐる現状を打開するために、本研究では、「きもの」文化を伝承するための、そして、世界へ発信するための教育プログラムを開発することを目的とした。「きもの」の内でも最も身近でカジュアルな浴衣を取り上げ、その着装を含めた「きもの」文化の理解を深める体験型教育プログラムを開発した。教材として「ゆかたがわかる」をテーマとするテキスト版、デジタル版を作成し、インターネットでの教育サービスの提供を試みた。浴衣の着方に関しては日本語版に加え海外に発信するための、中国語版、英語版のデジタル教材も作成し、海外へのインターネットでの教育サービスの提供を試みた。中学・高等学校の協力校10校(累積数)で授業実践し、授業前後に着物文化や着装感に関わるアンケート調査を実施した。授業実践後の調査結果の分析により日本の若者でも外国の若者でも浴衣の着付けの技能の習得は十分と捉えていないが、着付けの仕方を理解し、着装後に高揚感を感じ、それらの体験が着物文化への興味関心を高めることに貢献していることが確かめられた。「きもの」文化を紹介する本教育プログラムの開発は、日本の若年層に日本の「きもの」文化を尊重し継承・発展させようとする心を育て、外国の若者にも日本の伝統文化に対する関心を高め国際交流にも寄与できることが明らかとなった。

配当決定額

平成21年度	1,600,000円
平成22年度	1,300,000円
平成23年度	1,440,000円
合計	4,340,000円

研究の目的

現代は核家族化の定着、便利な機器の普及、家事の外部化によって、生活技術を伝承する機会が減少している。国際化・情報化の進展によってモノの入手が容易になる中で私たちの価値観も変化し、古き良きモノや自国の伝統・文化への関心は低くなっているようである。被服に目を向けると、日本の「きもの」文化は、これまで日常着として、あるいは“はれ”の場の衣服として日本の生活や自然と関わりながら、「きもの」の染色、織、縫製、着装に関わる技術に支えられ形成されてきたが、日常着が洋装化し既製服が普及した今日、これらの技術や文化が若者に理解されにくくなりつつある[14]。

このような背景の元、2006年の教育基本法が改正され[15]、それを受け、2008年3月(高等学校は2009年3月告示)の学習指導要領告示では[16]、国際社会で活躍する日本人の育成のため、我が国の郷土の伝統や文化を受け止め、それを継承、発展させるための伝統や文化に関する教育の充実を図ることが求められている。そして、中学校の技術・家庭科の衣生活分野では「和服の基本的な着装を扱うこともできること」が盛り込まれ[17]、日本の伝統文化である和服について着装も含めて理解するための教育、すなわち「きもの」文化に関する教育方法についての検討、新しい教育デザインが必要となってきた。従来、和服文化の伝承の媒体として「ゆかた」をとらえた研究[18]-[21]は見られるが、教育と直結した形での検討[22]-[23]は極めて少ないと推察される。また、一般に、和服の着装のDVDは販売されているが、これを中学校、高等学校での教育に取り入れることは行われてこなかった。中学生、高校生が見てわかりやすい着装DVDを開発し、研究授業に提供することは、新しい教育デザイン検討として位置づけられる。「きもの」の着装に関して、教育の現場で実際の研究授業を行い、着装教育にどのような準備が必要であるか、どのような方法がよいか、などの検討は、特に学術レベルでは十分に行われておらず、このような実践の蓄積が、新しい教育のデザインを組み立てていく上で欠くことができない作業である。大学生を主な対象とした「ゆかた」に対するイメージ評価に関する研究は、いくらか見られる[24]-[26]。これらをふまえ、「ゆかた」の着装に伴う、中学生・高校生が外見および心の変容により、衣服を着ることについて考えることを促すという側面、衣服の社会的役割について理解するという側面についても十分検討していく必要がある。

また、政府の施策の元、全国規模で外国人観光客が増加傾向にあり[27]、情報のみならず、人やモノの移動を含むグローバル化が進んでいる。外国人の日本文化への関心は高く、日本の文化を世界に発信する機会が増え、文化の相互交流はさらに進むと考えられる。しかし、日本の伝統文化をどのように伝えていくか、その方法についての検討もこれからといえる。

このような「きもの」文化をめぐる様々な状況を背景に、本研究では、家庭科の授業の中で「きもの」の中でも最もカジュアルで身近である浴衣の着装を含む体験的学習を通して日本の「きもの」文化を次世代に伝承することを意図して、また、グローバル化に対応し、外国の中学校での浴衣の着装を含む体験的授業実践を通して日本理解と文化交流の促進に貢献していくことを目指して教育プログラムの開発と授業実践および海外発信をすることを目的とした。

研究の方法

授業実践後の授業実践者へのインタビューや授業前後に実施した調査結果を分析・評価し、学習プログラムの改善を行なった。具体的には、「きもの」文化に関して生徒・教師がテーマ学習や授業で活用できるようなテキスト教材、e-learningデジタル教材を作成した。また、教材や授業法の改善により実践的・体験的な活動を通じて

浴衣の着付けがより効率よくできるようになるか、着ることを通して衣服と社会生活との関わりや服飾文化に対する生徒の興味・関心の喚起に寄与したか、興味・関心に性差はあるかなどを検証していった。併行して、本教育プログラムを題材とした教員研修を行い、家庭科の授業導入への参考として紹介した。授業の実施を希望する教員には、教育内容と環境を支援した。さらに、海外の研究者と連携して協力校の選定と海外での研究授業を行い、翻訳したテキスト教材・デジタル教材、インターネットによるe-Learning教育環境を利用し国内同様の授業実践と分析・評価を行った。

研究の実施計画

[平成21年度]

1) 教員を対象とする学校教育における「きもの」文化についての教育の現状調査と協力校の選定

次年度の研究授業候補校の家庭科教員を対象にインタビューを行い、「きもの」文化の授業での取り扱いの現状、現場で必要とされる「テーマ学習」教材、授業の構成、授業の進め方について調査する。また、協力校候補校教員との打ち合わせし、研究授業実施校を選定し、教材内容について検討する。

2) 浴衣を題材とした「きもの」についての印刷教材やデジタル教材の作成

和裁を専門とする分担者(呑山)を中心に所属大学のビデオ収録スタジオで浴衣の着装、たたみ方について撮影し、生徒を対象とした、浴衣を題材とした「きもの」についての印刷教材やデジタル教材を作成する。さらに、e-learning教材として活用するために「着方が分かる」「たたみ方が分かる」「産地が分かる」「縫い方が分かる」を切り口としたホームページの作成に着手する。

3) 海外への「きもの」文化発信のための教育プログラム開発の準備

パイプのあるイギリスのラフバラ大学大学院の teacher training (PGCE)の見学およびヒアリングを通じ、現地の中学校や、大学の Design and Technology に関する教育の現状にふれ、現地の Design and Technology や被服関連の研究者との連携を深め、海外での教育実践について検討する。具体的には、申請者および分担者1名がイギリスに赴き、協力校の選定、協力校での教員、生徒を対象としたインタビュー調査および、授業実践のための準備としての打ち合わせを行う。

[平成22年度]

1) 国内学会での研究成果の公表

前年度の成果を日本家庭科教育学会第53回大会、日本衣服学会第62回年次大会で公表した。

2) 浴衣を題材とした「きもの」文化についての「テーマ学習」教材の作成

申請者および分担者全員で、文化女子大学および、同大学が所蔵する服飾関連の資料により浴衣を題材とした「きもの」文化についての「テーマ学習」の教材を作成する。教材については、柄、模様、染め方、歴史など、その内容を吟味し、受講年齢にあっているか、日本の伝統文化を伝えることができるか、実際の着付けの図示方法を検討する。イラストレータを起用し、生徒の興味を喚起する等の工夫を図る。

3) 学習指導案の作成

平成21年度の浴衣を題材とした予備的研究としての授業実践をもとに家庭科教育関係学部にも所属する分担者(川端、堀内)により中学校・高等学校を対象とした浴衣とその着装を題材として、「きもの」文化の伝承と衣生活文化の充実を目的とした学習指導案マスタープランを作成し、分担者全員で吟味する。

4) 教育実践とその評価

作成した学習指導案により、作成した「テーマ学習」教材、印刷教材、デジタル教材を用い、協力校における研究授業を行う。あわせて授業前後の生徒を対象とした調査を行い、その結果を集計、申請者、および分担者全員での分析、評価を行う。

5) デジタル教材による国内向け教育サービスの提供

平成 21 年度に作成したデジタル教材を元に「着方が分かる」「たたみ方が分かる」の部分を見たい所から見られるようにし、ビデオから抜粋した写真や 2) で作成する静止画と同期させ、よりわかりやすく、使い勝手が良いようにすることを目標に再編成に着手し、e-learning 教材の充実を図り、国内向けの教育サービスが提供できる環境を構築、提供する。

6) 中学校・高等学校の教員を対象とした教員研修

中学校・高等学校の教員を対象とした教員研修において、本教育プログラムを題材とした研修を行い、「きもの」文化を取り扱う授業実践方法を提案する。

7) 英語版印刷教材、デジタル教材の開発

英語版「きもの」文化に関わる印刷教材を作成するとともに、昨年度作成した英語版浴衣の着装およびたたみ方の DVD を改良し、海外への発信の準備を進める。さらに、これらを用いてイギリスの中学校での授業実践内容、授業指導案について検討する。

8) イギリスにおける授業実践準備

申請者(薩本)および分担者 1 名がイギリスに赴き、平成 23 年度イギリスでの授業実践に向けて具体的な研究対象校との交渉を行ない、英文の学習指導案を含め準備を進める。

9) 中国語版印刷教材、デジタル教材の開発

申請者(薩本)、分担者全員により中国語版「きもの」文化に関わる中国版浴衣の着装およびたたみ方の DVD を作成し、印刷教材の作成について検討し、中国への発信の準備を進める。

10) 中国における授業実践準備

申請者(薩本)および分担者 3 名が中国に赴き、浴衣着つけワークショップを行う。

[平成23年度]

1) 国内学会での研究成果の公表

前年度の研究成果を(社)日本家政学会第63回大会、日本家庭科教育学会第54回大会で公表する。

2) 作成した教材を活用した授業実践とその評価

平成 22 年度に完成した「テーマ学習」教材を用い、協力校における研究授業を行う。あわせて授業前後の生徒を対象とした調査を行い、その結果を集計し、分析、評価を行う。

3) デジタル教材による国内向け教育サービスの提供

和裁が専門の分担者(呑山)が勤務校で作成する和裁の DVD を一部提供いただき、それを元に e-learning 教材の「縫い方がわかる」の部分を作成させ、国内向けの e-learning 環境の充実を図る。

4) 中学校・高等学校の教員を対象とした教員研修

前年度と同様、本教育プログラムを題材とし、中学校・高等学校教員を対象とした教員研修を実施し、「きもの」文化を取り扱う授業実践方法を提案する。

5) 英語版印刷教材の開発

平成 22 年度に完成した日本語版の「テーマ学習」教材を海外発信用に内容を厳選し、英語版「きもの」文化に関わる印刷教材を作成する。

6) イギリスにおける授業実践準備

国内での授業実践の成果も踏まえ、海外発信に向けての授業内容のさらなる改善に向けて検討する。イギリスに赴き、研究対象校との交渉を行ない、英文「テーマ学習」教材を活用した学習指導案作成を含め、これらを用いてイギリスの中学校での授業実践内容、学習指導案について検討し、準備を進める。

7) 英語版および中国語版のデジタル教材を e-learning 教材としてウェブ掲載

平成 22 年度に作成した英語版および中国語版の浴衣の着装およびたたみ方の DVD を元に、ホームページ上に e-learning 教材としてウェブ掲載し、海外への発信の e-learning 環境の充実を図る。

8) 「授業実践事例集および研究報告書」の作成

3 年間の研究内容を元に家庭科の担当教員を中心に授業実践および教育プログラム開発の過程で得られた成果を「授業実践事例報告書」および「成果報告書」としてまとめる。

研究の成果

1) 授業研究用教材としての浴衣の着装およびたたみ方の DVD 作成

平成 21 年度に和裁を専門とし着装を含めて長期にわたり教育・研究を行ってきた分担者(呑山)を中心に、着装 DVD の作成を実施した。7 月に大妻女子大学のビデオ収録スタジオにおいて男女ひとえ長着(浴衣)の着装の仕方、女子のみ、たたみ方についても撮影を実施し、日本語版、英語版ナレーションの吹きこみを行い、9~10 月に編集を行い、男女浴衣の着装・たたみ方の DVD を完成させた(Fig.1)。



Fig.1 Try-on-Yukata DVD and edit work scenery.
浴衣の着装ビデオおよび編集作業風景

2) 中国でのワークショップ実践用教材としての浴衣の着装・たたみ方の中国語翻訳版 DVD 作成

平成 21 年度の本研究の実践が広く紹介され、中国での浴衣着装ワークショップの実践が打診されたため、平成 22 年度には「中国での浴衣の着装ワークショップ実践を通して日本理解と文化交流の促進に貢献する」という目的の達成のために、ワークショップ実施に先立ち作成した日本語版 DVD の中国語版作成を試みた。和裁を専門とし着装を含めて長期にわたり教育・研究を行ってきた分担者(呑山)の監修の元、中国語を専門とする王氏、水原氏に翻訳ナレーションを委託し、平成 22 年 7 月に、大妻女子大学のビデオ収録スタジオにおいて中国語版ナレーションの吹きこみを行い、8 月に編集を行い、男女浴衣の着装・たたみ方の中国版 DVD を完成させた。

3) 浴衣を題材とした「きもの」文化についての「テーマ学習」教材の作成

「きもの」文化に関する調べ学習用の教材を作成し、生徒・教師が学べるようなテキスト教材を作成することを目標に、平成 21 年度にプロのイラストレータに委託して男女別浴衣の着装イラストを作成し、文化服飾博物館に依頼して同館所蔵の浴衣について写真撮影を行い、浴衣生地産地の産地や工程に関する教材作成のための取材として浴衣の伝統的な染めの技法を学ぶため浜松の「注染」染め工場および八王子の「長板中形」染め工場の見学を行うなど、準備を進めた。平成 22 年度は、これらに加え、色、模様、染め方、歴史など、「テーマ学習」の内容を吟味し、受講年齢にあっているか、日本の伝統文化を伝えることができるか、実際の着装の仕方の図示の方法などを検討し、浴衣に焦点を絞った「テーマ学習」教材を作成した。担当は、「きもの」文化に造詣が深い分担者(呑山・斉藤)とした。日本語版教材を元に平成 23 年度には海外発信用に内容を厳選し、英語版「きもの」文化に関する印刷教材を作成した。引用した図表・写真等はすべてオリジナルとした(Fig.2 参照)。



Fig.2 Cover of pamphlet “Introduction to the Yukata” in English and Japanese. 英語・日本語版教材表紙

4) 浴衣を題材とした「きもの」文化についての教材のデジタル教材化

上記「テーマ学習」教材をe-learning教材として活用するため平成 21 年度に「着方が分かる」「たたみ方が分かる」「産地が分かる」「縫い方が分かる」を切口としたホームページ制作に着手し、平成 22 年度には平成 22 年度に作成したDVDを元に「着方が分かる」「たたみ方が分かる」の部分を、視聴者が視聴したいページを選択できるようにすること、ビデオから抜粋した写真やイラストレータに作成を依頼した静止画と同期させ、よりわかりやすく使い勝手が良いようにすること、日本語版、英語版に加え中国版も加えることを目標に再編成した。さらに平成 22 年度末に完成した 5)の「テーマ学習」教材を元に「産地が分かる」「縫い方が分かる」他、浴衣の色・柄、染め、構成、さらに応用編として平面構成の文化、着物の種類とTPOなどを盛り込んだ。平成 23 年度には作成した英語版および中国語版の浴衣の着装およびたたみ方のDVDを元に、ホームページ上にe-learning教材としてウェブ掲載した。また、和裁が専門の分担者(呑山)が勤務校で作成する和裁のDVDを一部提供いただき、それを元にe-learning教材の「縫い方がわかる」の部分を完成させ、国内向けのe-learning環境の充実を図る予定である。なお、着装ビデオ他のe-learning教材は以下のサイトに掲載している。Fig.3 にトップページのイメージを掲載する。<http://kimono-bunka.ynu.ac.jp>



Fig.3 Top page of e-learning site e-learning web 教材のトップページ

5) 浴衣を題材とした日本での研究授業の実践

平成 21 年度には浴衣を題材とした授業研究の一環で行った横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校において授業実践した。授業実践およびその中で実施したアンケート調査の分析結果および感想、今後の課題についての研究成果を平成 22 年 7 月に日本家庭科教育学会第 53 回大会において「浴衣の着装を題材とした中学校技術・家庭科での授業実践」としてポスター発表した[8]。

平成 22 年度には平成 21 年度の授業実践の内容を踏まえ、教育系学部にも所属する分担者(川端、堀内)が指導案のマスタープランを作成した。5 つの協力校(千葉県立流山南高等学校、吉祥女子中学高等学校、洗足学園中学校・高等学校、横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校、川崎市立金程中学校)の授業担当者が各校の生徒の実態に合わせた学習指導案を作成し、授業を実施したが、その際に教材・資料の提供と授業補佐などの協力を行った。平成 21 年度の実践を通して日本の伝統文化の伝承のための、浴衣の着装による授業の効果が見られたものの、限られた授業時間の中で効率よく着付けの技術を習得させるには、さらなる工夫が必要であることが明らかとなった。そこで、被服構成学・被服教育を専門とする分担者(川端)が関わる協力校の授業実践では、難易度の高い帯結び練習の時間を設けてから着装実習を行った。また、授業時間の多くが着装に費やされ、着装についての振り返りや、互いに浴衣姿を見合ったりする時間が充分取れなかった点については、ペア学習の手法を取り入れ着装の出来栄を相互評価すること、振り返りのために写真撮影をして着装状態を自己評価することなどの工夫を行った。さらに、授業の前後に行ったアンケート調査結果を分析し、実践的・体験的な活動を通じて浴衣の着装がより効率よくできるようになったか、着ることを通して衣服と社会生活との関わりや服飾文化に対する生徒の関心の喚起に寄与したか、教師の意図が生徒の学びとして成果を上げているかなどを検証した。研究成果は(社)日本家政学会第 63 回大会(平成 23 年 6 月)で発表した[11]。分担者(堀内)が関わる協力校の授業実践では学習を通して、「和」の生活文化を生徒に体験させ、日本の伝統文化に親しむ機会を与え、自国の文化の独自性ととも生活様式の変化やグローバル化に対する意識を喚起させることを意図して「和」の生活文化を題材にした授業が実践された。研究成果は日本家庭科教育学会第 54 回大会(平成 23 年 6 月)で発表した[10]。

平成 23 年度においては、平成 22 年度の授業実践を分析・評価し、完成したテキスト教材を活用して生徒・教師がさらに学ぶようにし、実践的・体験的な活動を通じて浴衣の着付けがより効率よくできるようになったか、着ることを通して衣服と社会生活との関わりや服飾文化に対する生徒の関心の喚起に寄与したかなどを検証していった。

これまでの授業実践により、着装実習を教師一人での実践は難しいという意見がでていた。大学と附属の連携も求められており、学生に学校現場を体験させる機会ともなることから、申請者(薩本)が関わる協力校である附属中学校の授業実践では着装の示範や実習補助のためにアシスタントティーチャー(AT)として学生を参加させた。教員のみでの授業実践と比較して、複数の AT の補助は明らかに教員にも生徒にも余裕を与え、短時間で技能を教授する上で効果的であった。授業前後のアンケートの結果を基に、技能の理解・習得を目標とする着装体験がきもの文化への興味・関心を喚起するかについて検証した。共分散構造分析の結果、「理解習得因子」から「興味関心因子」へのパス係数が有意であった。このことより「技能の理解・習得を目標に着装体験することがきもの文化への興味・関心を喚起する」という仮説が成り立つことが立証された。さらに男女による差異より、男女間のゆかたの色柄の違い・着付けの難易度の違いがある中で、男女ともにきもの文化に対する興味関心を喚起し、理解習得を肯定的にとらえさせるためには、授業のさらなる工夫の必要性が明らかになった。帯結び部分練習の有無の差異より、部分練習をすると理解習得意識が高まり、それが興味関心喚起に結びつくことがわかった。授業の様子は教育新聞社の取材を受け新聞に掲載された[29]。

分担者(扇澤・川端)が関わる協力校の高等学校での授業実践では家庭科教員の配属増があり、前年度までのクラス単位の実践を改め、1 年家庭総合は 1 クラスを 2 分割して履修させた。その一環で行った着装実習では前年度と比較して室内にゆとりが増し、生徒に目が行き届き、必要な場面で個別指導が可能となり、生徒

の理解度を高め、満足度も高まった。これらの実践結果および分析結果から実習で技能面の定着を図るためには教員とATの充足が効果的であることが裏付けられた。

分担者(川端)が関わる協力校の授業実践では平成22年度に取り組んだ着付け技能の評価は、目的に応じた着方、着方を通して社会生活との関わりに気づく題材にはなりうるとはいえ、両者を十分に関連づけるものではなかった。平成23年度には、衣服の歴史をたどる中で和服について取り上げ、衣文化への興味・関心を高めさせるとともに、衣生活全般への視野を広げて洋服とは異なる「よさ」に気づき、自分の今後の衣生活に生かそうと工夫する態度を育み、礼儀やマナーにもつながることに気付かせることを目標に授業実践した。研究成果は協力校教員が中学校研究評議会で報告し[28](社)日本衣服学会第63回大会(平成23年11月)で発表した[13]。

6) 浴衣を題材とした「きもの」文化についての教員研修の実施

家庭科教育関係学部にも所属するプロジェクトメンバー(薩本・川端)が、本教育プログラムを題材とした教員研修を免許更新講習と認定講習の中で平成22年度、23年度に実施し、家庭科の授業導入への参考として紹介した。講習時にアンケートを実施し、その結果を解析し、授業実践報告書の中に成果をまとめた。また、授業の実施を希望する教員には、教育内容と資料提供面から個別に支援した。筑波大学附属聴覚特別支援学校中学部の家庭科教員はプロジェクトのDVDに字幕をつけ学校用にアレンジして授業実践を行った。

7) 海外への「きもの」文化発信のための教育プログラム開発のための浴衣着装ワークショップ

7)1 中国上海での浴衣着装ワークショップ

平成22年9月24日(金)に日本文化サロン「人文雅集-益田屋」(上海)にて、中国人、在中日本人の参加者約40人を前に「浴衣着装ワークショップ in 上海」を開催した(Fig.4 参照)。冒頭、「きもの」文化に造詣が深い分担者(呑山)が「人文雅集-益田屋」代表・邵陽氏の通訳を交えて、きもの歴史と文化に関する講演を行った。その後、男女別に中国語版のDVDを上映し、浴衣の着方を学んでもらい、プロジェクトメンバーとTAの学生による着付けの補助の元、参加者が浴衣を実際に着装した。浴衣着装のワークショップに先立ち、①日本の現代・伝統文化に関するアンケートを行い、ワークショップ後に②開発した中国語版浴衣の着装・たたみ方ビデオの評価、着装後に、④着装感アンケートを実施した。また、研究成果は(社)日本家政学会第63回大会で平成23年6月に学会発表した[12]。

なお、上海での着装ワークショップの様子は、以下の横浜国立大学および大妻女子大学のホームページで紹介された。

<http://www.ynu.ac.jp/hus/edu/1085/detail.html> (横浜国立大学)

<http://www.gakuin.otsuma.ac.jp/university/news/2010/2010-1004-1641-4.html> (大妻女子大学)

7)2 イギリス Burton on Trent での中学生対象の浴衣着装ワークショップ



Fig.4 Try-on-Yukata workshop in China.
中国での浴衣ワークショップ

平成 21 年 10 月にイギリスのラフバラにて日本人会とラフバラ大学の共同研究者 Zanker 氏 (Design & Technology Department) の協力により、現地の大学生および社会人対象に浴衣着装のワークショップを実施した。その研究成果は平成 22 年 10 月に日本衣服学会第 62 回年次大会において『「きもの」文化の海外発信をめざしたイギリスでの浴衣着装ワークショップ』として口頭発表した[9]。

平成 22 年度は前年度にラフバラ大学浴衣着装ワークショップに参加した Stephens 氏(当時、現職教員大学院修士課程在籍)が所属する Burton on Trent の Blessed Robert Sutton School で中学生(15 歳クラス(35 名)と 11 歳クラス(20 名))を対象に英語版着装 DVD を用いた浴衣着装ワークショップを行った(Fig.5 参照)。男女別に英語版の DVD 上映で浴衣の着方を示し、プロジェクトメンバー(斉藤・薩本)が着付けを補助、生徒が浴衣を実際に着装した。ワークショップに先立ち、事前に①日本の現代・伝統文化に関するアンケートを行い、ワークショップ後に②開発した英語版浴衣の着装・たたみ方ビデオの評価、着装後に、④着装感アンケートを実施した。

平成 21、22 年における英国での浴衣ワークショップの内容は日本衣服学会誌 Vol.54, No.2, 105-106 (2011) に海外レポート「英国での浴衣着装ワークショップ」として掲載された[5]。

平成 23 年度は前年度に引き続き協力校である Burton on Trent の Blessed Robert Sutton School で中学生を対象に開発した英語版テキスト教材を用いて浴衣着装ワークショップを行った。対象は year15 の 2 クラス(各 20 名)である。申請者(薩本)および分担者(川端)および両大学他の学生 9 名の総勢 11 名で出かけ実践した。最初に英語版“Introduction of Yukata”のテキスト教材(Fig.7)を用いてゆかたの文化面の紹介をした後(Fig.6)、TA として参加した学生が着装を示範し、その後、教員および TA の学生が着付けを手伝いつつ、浴衣を実際に着装してもらった。男女で着装終了までの時間差があるため、当日は折り紙で手裏剣を作成するワークショップも学生の発案で実施し、そちらも好評だった。次の日にはラフバラ大学の Design School の大学院生 18 名を対象に同様のワークショップを行った。こちらでは学生の 1 人が振り袖姿を披露し(Fig.8)、正装の着物のアピールも行い好評だった。



Fig.5 Try-on-Yukata workshop to junior high school in UK.

英国の中学校での浴衣着装ワークショップ



Fig.6 Introduction of kimono culture. きもの文化紹介



Fig.7 Demonstration of how to put on Yukata 浴衣着装法のの示範



Fig.8 Demonstration of “Furi-sode”. 振り袖姿の披露

まとめ

以上、3年間のプロジェクトで本研究の目的に沿って研究を実施し、着装DVDの中国語版の作成とe-Learningへの応用、日本における浴衣を題材とした研究授業、中国、イギリスにおける浴衣ワークショップや授業実践、「きもの」文化に関して生徒・教師が学べるようなテキスト教材の作成など、着実に成果を上げてきた。授業実践では、過去2年間の実践の課題を踏まえ授業実践の方法に工夫を凝らした。実践の結果、日本の伝統文化の伝承のための、浴衣の着装を題材とした授業の効果が見られたが、学校の生徒やカリキュラムの現状に合わせた内容のさらなる工夫も必要であることが確認された。

平成23年度においては、平成22年度の授業実践を分析・評価し、完成したテキスト教材を活用して授業実践前後に生徒・教師がさらに学べるようにし、実践的・体験的な活動を通じて浴衣の着付けがより効率よくできるようになったか、着ることを通して衣服と社会生活との関わりや服飾文化に対する生徒の関心の喚起に寄与したかなどを検証していった。併行して、平成22年度に引き続き本教育プログラムを題材とした教員研修を行い、家庭科の授業導入への参考として紹介し、授業の実施を希望する教員には、教育内容と資料提供面から支援した。さらに、完成したテキスト教材を翻訳し、デジタル教材、e-Learning教育環境を利用し、海外の研究者と連携して海外での研究授業を行い、国内同様の授業実践と分析・評価を行った。これまでの成果の一部は学会で口頭発表し、紀要、学会誌に掲載された[4][5]。また、国内での実践事例を実践報告書[7]にまとめた。今後、さらに研究成果を学会誌などに発表する予定である。

謝辞

本研究を遂行するにあたり、下記の方々に支えていただいた。ここに紹介し、感謝の意を表したい。
大妻女子大学メディア教育開発センター・山田光栄氏、同大学助手・與儀由香里氏、同大学学生・松田美波氏、翻訳家・増田久美子氏、お猿パンカニー長倉圭吾氏、横浜国立大学非常勤講師・角田麻里氏、同大学非常勤講師・王凌氏、同大学教育人間科学部マルチメディア文化課程・山本光氏、同大学非常勤講師・森隆一氏、同大学学生・竹内達哉氏ら、同大学学生・遠藤亮将氏、千葉県立保健医療大学・井上裕光氏、埼玉大学学生・松井萌恵氏、小林由実氏、千葉県立流山南高等学校家庭科・仲田郁子教諭、吉祥女子中学高等学校家庭科・樋浦陽子教諭・山根晶子教諭、洗足学園中学校・高等学校家庭科・山口香教諭、横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校家庭科・中尾由美子教諭、同大学教育人間科学部附属横浜中学校家庭科・葛川幸恵教諭(当時)、菅田浩美教諭、川崎市立金程中学校家庭科・長谷川伸子教諭、文化学園服飾博物館学芸室室長・植木淑子氏、文化学園大学・水原寿里氏、浜松織物染色加工協同組合事務局長・曾布川之宏氏、二橋染工場専務・二橋教正氏、野口染色工場代表・野口汎氏、「人文雅集—益田屋」代表・邵陽氏、在上海日本国総領事館広報文化センター・徳増かおる様、Design & Technology Department・Nigel Zanker氏、ラフバラ町日本人会代表・篠沢久二子氏、浴衣着装ワークショップに参加して下さった皆様、Blessed Robert Sutton SchoolのStephens氏および浴衣着装ワークショップに参加して下さった生徒たち。

主な発表論文等

[雑誌論文]

1. 薩本弥生, 川端博子, 堀内かおる, 扇澤美千子, 斎藤秀子, 呑山委佐子, 「きもの」文化の伝承と発信のための教育プログラムの開発—「きもの」の着装を含む体験学習と海外への発信—, 服飾文化共同研究

報告 2009,90-95(2009)

2. 薩本弥生, 「きもの」文化の伝承と海外発信をめざすプロジェクト研究をめぐって, 大修館書店大修館書店家庭科通信 43 号Vol.15 No.3, 3-9(2010.10)
3. 薩本弥生, 川端博子, 堀内かおる, 扇澤美千子, 斎藤秀子, 呑山委佐子, 「きもの」文化の伝承と発信のための教育プログラムの開発ー「きもの」の着装を含む体験学習と海外への発信ー, 服飾文化共同研究報告 2010,18-23(2010)
4. 薩本弥生, 川端博子, 堀内かおる, 扇澤美千子, 斎藤秀子, 呑山委佐子, 「きもの」文化にかかわる教育プログラム開発の教育デザイン, 横浜国立大学教育デザイン創刊号, 100-103(2010)
5. 薩本弥生, 海外レポート「英国での浴衣着装ワークショップ」, 日本衣服学会Vol.54, No.2,105-106(2011)
6. 薩本弥生, ゼミ紹介「きもの」文化の伝承と発信をめざした教育・研究活動紹介, 全国家庭科教育協会, 掲載予定(2012)
7. 薩本弥生, 川端博子, 堀内かおる, 扇澤美千子, 斎藤秀子, 呑山委佐子, 「きもの」文化の伝承と発信をめざした授業実践報告書, 3月(2012)

[学会発表]

8. 薩本弥生, 川端博子, 堀内かおる, 扇澤美千子, 斎藤秀子, 呑山委佐子, 浴衣の着装を題材とした中学校技術・家庭科での授業実践, 日本家庭科教育学会第53回大会, 平成22年7月
9. 薩本弥生, 川端博子, 堀内かおる, 扇澤美千子, 斎藤秀子, 呑山委佐子, 『きもの』文化の海外発信をめざしたイギリスでの浴衣着装ワークショップ, 日本衣服学会第62回年次大会, 平成22年10月
10. 堀内かおる, 薩本弥生, 川端博子, 扇澤美千子, 斎藤秀子, 呑山委佐子, 「和」の生活文化を経験する家庭分野の授業実践 中学校における浴衣の着付けを導入した試みから, 日本家庭科教育学会第54回大会, 平成23年6月
11. 川端博子, 松井萌恵, 薩本弥生, 呑山委佐子, 斎藤秀子, 扇澤美千子, 堀内かおる, ゆかたの着装を題材とした着実習の試み, (社)日本家政学会第63回大会で平成23年6月
12. 薩本弥生, 呑山委佐子, 斎藤秀子, 川端博子, 扇澤美千子, 堀内かおる, 「きもの」文化の海外発信をめざした中国での浴衣着装ワークショップ, (社)日本家政学会第63回大会, 平成23年6月
13. 小林由実, 加藤順子, 川端博子, 薩本弥生, 斎藤秀子, 呑山委佐子, 浴衣の着装を題材とする教育プログラムの提案, 日本衣服学会第63回年次大会, 平成23年11月

参考文献

14. 横川公子, 服飾を生きる:文化のコンテキスト, 化学同人(1999)
15. 文部科学省ホームページ 教育基本法資料室
http://www.mext.go.jp/b_menu/kihon/houan.htm
16. 文部科学省ホームページ 新学習指導要領の基本的な考え方
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/idea/index.htm
17. 文部科学省ホームページ 中学校学習指導要領解説
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chukaisetsu/index.htm
18. 城 眞理子, 内田 恵美子, 幡野 暁子, 和服文化の伝承媒体としてのゆかたを考える, 織消誌 41(4),45-55(2000)

19. 小菅 充子, 布施谷 節子, 三世代にわたる生活文化の伝承と将来への展望(4):食生活と衣生活における祖母との同居・非同居の関連性, 和洋女子大学紀要. 家政系編42, 81-89(2002)
20. 布施谷 節子, 小菅 充子, 中島 明子, 名取 史織, 三善 勝代, 三世代にわたる生活文化の伝承と将来への展望(3):男子学生と女子学生の比較, 和洋女子大学紀要. 家政系編42, 109-124(2002)
21. 小菅 充子, 布施谷 節子, 三世代にわたる生活文化の伝承と将来への展望(1):食生活と衣生活について, 和洋女子大学紀要. 家政系編41, 97-106 (2001)
22. 中村哲編「伝統や文化に関する教育の充実—その方策と実践事例—」(株)教育開発研究所(2009)
23. 鈴木明子, 被服製作実習における授業プロンプトの有効性の検討-浴衣製作実習における学生の記述分析を通して-, 日本教科教育学会誌,26(3)33-39(2003)
24. 川上梅, 再見による服装イメージ評価の変化—中学・高校・大学生女子の新奇なゆかたに対する印象, 織消誌 44(11)673-681(2003)
25. 呑山委佐子, 小嶋葉子, 田村友香, 女子大生の和服に関する意識と変わり浴衣の受容態度, 大妻女子大学家政系研究紀要 38, 31-41 (2002)
26. 杉山真理、小林茂雄、女子大学生のゆかたに対するイメージ、共立女子大学家政学部紀要 40,37-42(1994)
27. 観光庁 訪日外国人旅行者数および日本人海外旅行者数の推移
http://www.mlit.go.jp/kankocho/siryou/toukei/in_out.html
28. 平成 23 年度中学校研究評議会資料 学習指導案綴 P32-35、埼玉大学教育学部附属中学校編集・発行 (2011)
29. 浴衣を通して伝統文化の理解-着付け体験学習-, 教育新聞, 第 3044 号 3 面,7 月 7 日(2011)